

83. 鈴鹿山系霊仙山の ニホンカモシカ

はじめに

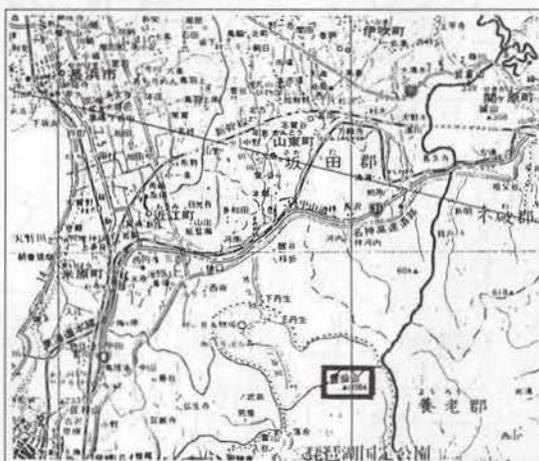
霊仙山(標高1084m)は伊吹山のすぐ南に位置し、犬上郡多賀町を頂点に坂田郡山東町、米原町および岐阜県にまたがる南北約5km、東西約4kmの山塊を示す。鈴鹿山系北端にある当地は南へ烏帽子岳、三国岳、御池岳、藤原岳へと連続しているが五僧付近を南端として独立峰に近く、山懐の深い大きな山域といえる。

当地に国の特別天然記念物ニホンカモシカ(*Capricornis crispus* Temminck, 以下カモシカという)が生息することは川村(1972)・古林ら(1979)の報告等に記述されている。しかしいずれも聞き込みを主とした広域調査であり霊仙山のみの小地域での調査ではない。筆者は1976年より当地で直接観察法を主としたカモシカの調査を継続実施しており、今回はその概要を報告したい。本報が地元の方々の動物保護理解のための一資料となれば幸いである。

調査地

調査地と既踏査ルートを図1に示した。調査地は霊仙山の南西部を除く標高400m以上の地域である。

過去2年間調査地内にあるベースキャンプ(標高810m)で気温を測定した。その結果、年平均気温5.7℃、最高平均気温は8月の18.1℃、最低平均気温は2月の-6.6℃となった。降雪量は年により変動巾が大きい。一般に12月に初冠雪があり、1月中旬より本格的な



霊仙山位置図

積雪期に入る。さらに2月中旬に1.5mほどの最多積雪を記録し、4月上旬までには融雪する。特に1月中旬から2月一杯は厳冬期といえるほど寒く、全般に日本海型気候の傾向が強い。

植生は標高500m~600m付近まではアカガシ、ウラジロガシを含む暖帯林上部で、さらに上はコナラ・クリを含み一部にブナ・ミズナラクラス林も残る温帯林へ移行している。頂上部は石灰岩でカルスト地形もみられる丘陵状のササ原でミズナラなどの小灌木が点在している。全体に自然林が残っているようにも思えるが、全域に炭焼釜跡が残りこの為の二次林といえそうであるし、スギを主体とする植林が頂上部付近まで施行されており人手がかなり加わっている。気温変化が



山東町河内からみた霊仙山



ニホンカモシカ

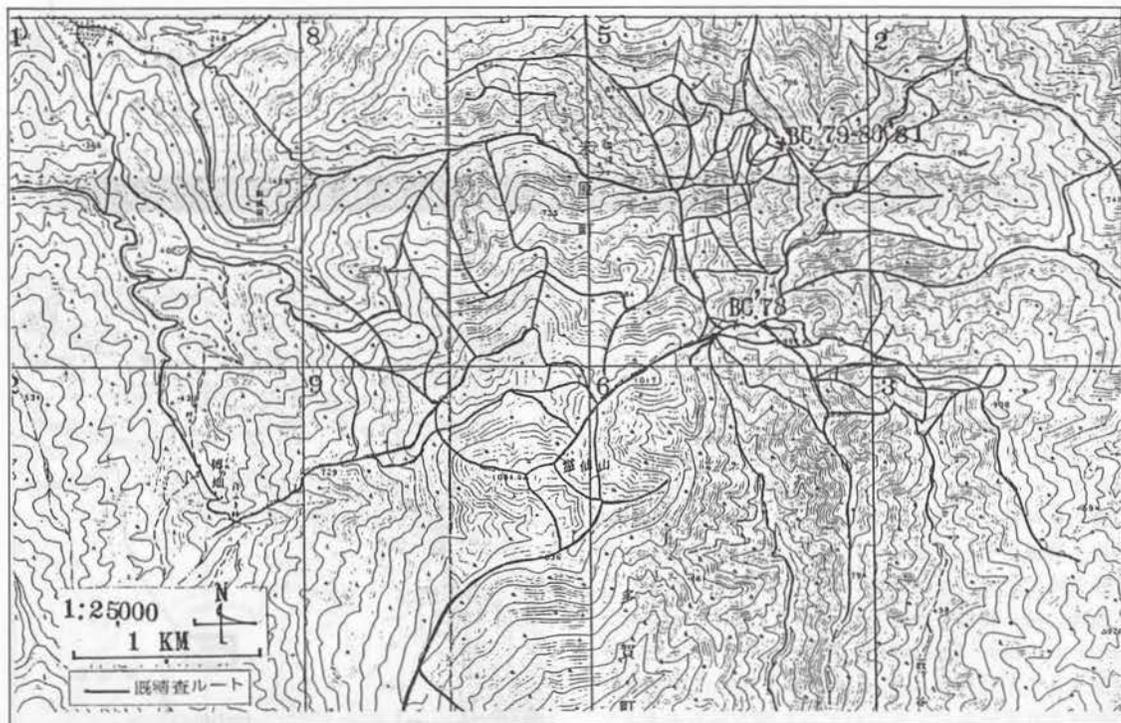


図1 調査地

ら求めた暖かさの指数は74.0℃で、寒さの指数は-20.5℃となった。このことから本来霊仙山上部は温帯落葉樹林を形成する条件を備えているといえる。

調査期日と調査方法

1977年1月8日より1979年10月21日までのべ128日間、図1の踏査ルートが無作為に用い調査地内の全域踏査を行った。又この間に北霊仙頂上直下、藪が谷上部、谷山谷下部、柏原登山道七合目下に定点を置き全域踏査を補足した。

1979年10月28日より現在(1981年8月)まで毎週1日以上、のべ170余日間、谷山谷上部の県設米原町鳥獸保護区内で定点観察を継続中である。

いずれの調査も双眼鏡(10倍)、単眼鏡(25・40倍)を補助とした直接観察を行い、写真による記録に努めた。

目撃された大・中型哺乳動物

生息を目撃した大・中型哺乳動物は次の10種である。

- | | |
|--------|--------|
| オナガザル科 | ニホンザル |
| ウサギ科 | ノウサギ |
| イヌ科 | ホンドタヌキ |
| | ホンドギツネ |
| イタチ科 | ホンドテン |
| | ホンドイタチ |



ニホンカモシカ母子群

- | | |
|-------|---------|
| | ニホンアナグマ |
| イノシシ科 | ニホンイノシシ |
| シカ科 | ニホンジカ |
| ウシ科 | ニホンカモシカ |

(特別天然記念物)

他に生息が推測されるものにムササビがあるが、目撃例、生息痕跡ともみだしていない。ニホンツキノワグマは目撃例、生息痕跡ともなく、聞き込みにおいても確実な情報が得られなかったので当地には生息していないものと思われる。

以上に示した大・中型哺乳動物は富田(1979)のう鏡鹿山系ブロックに生息する哺乳類に一致している。

ゆえに霊仙山には鈴鹿山系の他地域と同様の大・中型哺乳動物が温存されているといえる。

生息密度の概算と分布の状況

図1のメッシュ中、全域踏査により確認されたカモシカの頭数は21頭であり踏査面積は約15.5km²であった。ゆえにこの踏査域内での生息密度は約1.35頭/km²になった。(短期間に生息密度を求めることはきわめて困難であり、今回算出した生息密度も今後精度をたしかめる必要があるので概算としたい。)1979年8月に環境庁より発表された全国平均生息密度は2.66±0.21頭/km²であった。これにくらべ当地での1.35頭/km²という生息密度は低密度といえる。

カモシカの小地域での分布については木内ら(1979)の朝日連峰での観察のように各家族群の行動圏が重複していないことが多く、各家族群固有の行動圏が生息可能域内で連続しているのが一般的と考えられる。しかし当地では生息可能域にもかかわらず生息痕跡がなかったり、以前生息していた地域でもその後カモシカがあらわれなかったりしており全体に均一な分布とはいえない。カモシカの分布に粗密がみられ、特にカモシカが生息可能域と思われるのにみられない箇所が多いことが当地の生息密度を低くしている要因と考えられる。なぜこのようなまばらな分布になったのか、さらに今後どのような分布になっていくのか推移に注目していく予定である。

東ら(1977)は御岳山塊でのカモシカの分布構造を調査して、カモシカが季節移動して冬期には下降し、さらに二次林内に集中して生息する傾向があると述べている。霊仙山の定点周辺の植生はスギの幼齢植林地とその周囲の二次林に大別される。厳冬期に入り、ニホンジカも下降して姿を見せなくなるような積雪の状態になると当地でもカモシカの行動圏は二次林内に限定された。個体識別されたカモシカの入りこんだ0.25km²ほどの二次林内では最高6頭がほぼ同時に観察された。しかしこの二次林の一部は個体識別されたカモシカの夏の行動圏内であり、当然標高にも変化はない。つまり霊仙山では、積雪期においてカモシカが二次林内に集中して分布する傾向はあるがほぼ夏の行動圏内で、季節的移動は起こっていないようだ。

定点付近での生息状況

定点観察で観察時間あたりに出現したカモシカとニホンジカの頭数を図2に示した。カモシカは定点周辺に通年生息する。1、2月に発見頭数が



ラッセルして行動中のニホンカモシカ

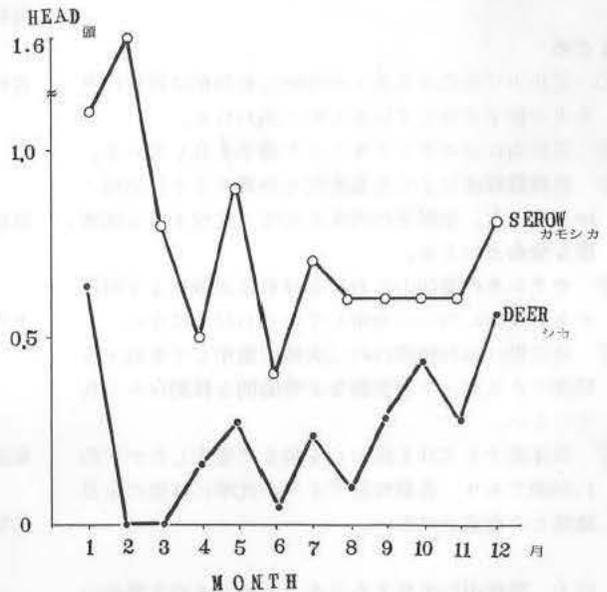


図2 観察時間あたりのニホンカモシカ、ニホンジカの出現頭数

多いのはこの時期一部二次林に集中してくることが原因の一つと考えられる。他の月の発見頭数はほぼ一定で、年平均観察時間1時間あたり0.77頭の出現率となった。

ニホンジカは2、3月には定点周辺では観察されていない。これは積雪のため行動が困難となり下降移動したと思われる。4月以降繁殖期である10月～1月にかけて出現頭数が漸次増加していくのは再び上方へ移動してくることを示していると思われる。

次に個体群サイズとその月別変化について述べたい。定点から観察されるのは1家族群(3頭)にすぎないため全域踏査中の観察例も含めた個体群サイズを図3に示した。赤坂(1978)は秋田県仁別、新潟県笠堀、石川県白山に生息するカモシカの個体群サイズを比較して、地域により個体群サイズに有意差がないことを示した。霊仙山の個体群サイズも同様に前述の各地と比較してみるとやはり有意差はないことがわかった(危険率5%)。年平均個体群サイズは1.28頭になった。個体群サイズの月別変化を図4に示した。若干のバラつきはあるものの通年同じような個体群構成をしている。以上から通年単独行動していることが多いことになるが、実際はもう少し複雑で時間的に変化しうるものである。つまり単独行動することの多い成獣雄はときにツガイとなる成獣雌や成獣雌と子に出会うとそこからツガイや家族群として行動を共にする。さらに家族群の採食移動の途中で成獣雌と子より別れ再び単独で行動しだす。最大4頭群まで観察されたがいずれの個体群サイズも血縁関係のあるカモシカ同志が集合するようである。

まとめ

- ① 霊仙山に生息する大・中型哺乳動物相は鈴鹿山系本来の様子を残していると思われる。
- ② 霊仙山にはニホンカモシカが通年生息している。
- ③ 直接観察法により生息密度を概算すると1.35頭/km²となった。全国平均の生息密度と比較すると低密度な分布といえる。
- ④ カモシカの霊仙山における分布は地域により粗密があり全体に均一に分布しているわけではない。
- ⑤ 積雪期には行動圏内の二次林に集中して生息する傾向があるが、下方移動など季節的な移動はみられていない。
- ⑥ 個体群サイズは1頭から4頭まで変化した平均1.28頭であり、各個体群サイズの比率には他の生息地域との有意差はない。

以上、霊仙山に生息するニホンカモシカの生態の一部を述べてきた。カモシカをはじめ哺乳動物ではその

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 頭群合計 |
|------|------|------|-----|-----|------|
| 目録頭数 | 144 | 43 | 6 | 1 | 194頭 |
| 比率 % | 74.2 | 22.2 | 3.1 | 0.5 | 100% |

図3 カモシカの個体群サイズ

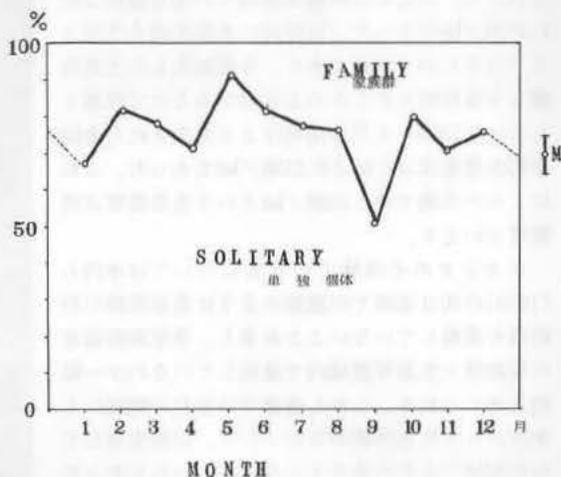


図4 出現個体群構成の月別変化

一生活環にかかる年月が長いので、調査には長期間を必要とする。またそうしないと本来の姿を見誤る可能性が大となる。当地のカモシカの調査も今後さらに継続する必要があるし、そうしたいと考えている。

(名和 明)

引用文献

- 川村俊蔵(1972) 滋賀県の自然に関する調査報告補足資料。滋賀県
- 古林・岩野・丸山(1979) カモシカ・シカ・ヒグマ・ツキノワグマ・ニホンザル・イノシシの全国的生息分布ならびに被害分布。生物科学31(2)。岩波書店
- 富田靖男(1979) 三重県の哺乳動物相。三重県立博物館報告、自然科学第1号。三重県立博物館
- 木内正敏ら(1979) 朝日連峰・朝日川流域におけるニホンカモシカ(第二報)。特別天然記念物カモシカに関する調査報告書II。日本自然保護協会
- 東滋ら(1977) 岐阜県ニホンカモシカ生態調査報告書。自然史研究会
- 赤坂猛(1979) 秋田県仁別のカモシカの社会構造—社会単位—。特別天然記念物カモシカに関する調査報告書II。日本自然保護協会